

ヒト軟口蓋の筋構成に関する肉眼解剖学的研究

○角田 佳折, 北村清一郎

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

口腔顎顔面形態学分野

系統解剖学実習用10遺体20側で軟口蓋の筋構成を調べ、口蓋咽頭筋や耳管咽頭筋などの咽頭縦走筋と、口蓋帆挙筋や口蓋腱膜との関わりを検討した。口蓋咽頭筋は浅・深2層に分けられ、浅層ではA1～A3の3筋束が区別された。A1・A2筋束は口蓋帆挙筋の口腔側にあり、前者は口蓋腱膜すぐ後方の正中で、対側の同名筋束と合した状態で生じ、後者は口蓋腱膜後縁より生じた。A3筋束は、口蓋帆挙筋の鼻腔側で、軟口蓋の鼻腔側粘膜下で生じた。耳管咽頭筋は、口蓋帆挙筋の鼻腔側で耳管軟骨より生じ、A3筋束より外側に位置した。これらの筋・筋束は後方に向かい、口蓋帆挙筋の後縁を過ぎた位置で合流し、口蓋咽頭弓を形成して下方に向かった。一方、深層の筋束は口蓋帆挙筋の口腔側にあり、A2筋束の鼻腔側で口蓋腱膜後縁より生じ、上咽頭収縮筋の内面を裏打ちしつつ、咽頭後壁筋層の上縁をなし、咽頭峽を取り巻くように走って咽頭後壁正中に達した。

サイナス・リフトに必要な局所解剖学の知識

三好 正希, ○藤崎 翔*

芝辻 豪士*, 角田 佳折**

森本 景之**, 北村清一郎**

徳島大学歯学部3年学生

*徳島大学歯学部4年学生

**徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

口腔顎顔面形態学分野

サイナス・リフトを実施するにあたり知っておくべき局所解剖学的事項を、口腔解剖学第一講座の研究基礎ゼミ受講生が調べた内容である。

- ・上顎洞粘膜が骨壁に固着しておらず、容易に剥がれることが、サイナス・リフトが可能となる一番大きな因子である。
- ・サイナス・リフトの際の開窓部位となる上顎洞の前外壁と後外壁の厚さは、前外壁の小白歯部で0.5～3.5mm、後外壁の大白歯部で0.5～4.0mmである。
- ・上顎洞底における骨稜の存在も、サイナス・リフトを行う上で重要な解剖学的事項にあげられる。骨稜の部では、粘膜が骨壁に固着しており、上顎洞粘膜を剥離する際に、上顎洞粘膜が裂けてしまうからである。
- ・頬骨下稜の中心線より前方10mmまでの範囲は骨稜の出現が少なく、サイナス・リフトの際の開窓部位とし

ては適切と考えられる。

パノラマX線写真による8020運動の検証

○佐藤 真大, 小池 一幸*

菅原千恵子**, 前田 直樹**

細木 秀彦**, 岩崎 裕一**

菅田 栄一**

徳島大学歯学部3年次学生

*徳島大学歯学部5年次学生

**徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

口腔顎顔面放射線医学分野

【目的】

80歳で20本以上の歯を保つことを目標とした8020運動が1989年に始まり、2000年からは健康日本21の中で2010年には80歳で20本以上もつ人を20%以上にするという具体的な目標値が掲げられた。今回、パノラマX線撮影を行った80歳以上の患者のX線写真から8020運動の成果を検証する。

【対象】

2002年9月9日～2004年9月8日(2年)の間に、本院を受診した患者の中で撮影を行った80歳以上の患者のパノラマX線写真を対象とした。

【方法】

80歳以上の患者でパノラマX線撮影を行った患者の一覧表をRIS(放射線情報システム)から抽出し作成した。その一覧表をもとにX線写真から各歯種の有無を判断し集計した。尚、期間内に複数回の撮影が行われていた場合は、最初に撮影されたX線写真を検討対象とした。

【結果および考察】

2年間にパノラマX線撮影を行った80歳以上の患者は119名であった。そのうち悪性腫瘍の治療に関与して抜歯が行われた6名は対象から除外した。したがって検討対象は、113名(男性49名、女性64名、年齢80.1～98.4歳、平均年齢84.6歳)であった。

歯数の最高は27本であった。1人平均残存歯数は全体では7.89本であった。年齢別では80～84歳が67名で7.48本、85～89歳が37名で9.16本、90歳以上が9名で5.78本であった。性別では男性10.1本、女性6.17本であった。20本以上を有していたのは、20名で全体の17.7%であった。一方、無歯顎者は39名で同じく34.5%であった。対象期間より前にもパノラマX線撮影が行われていた患者は20名(19.5%)で、歯数の経年的変化を確認できたが、それらのうち9名については最初の撮影の時点で無歯顎であった。

今回の検討結果からは、80～84歳の数字を用いれば現状は8007と推定される。

【まとめ】

今回の検討からも8020の達成には、更なる時間が必要